日本陸軍悪玉の第三弾

# 「インパール作戦(昭和19(1944)/3～7)/後編」

令和6年4月4日

横浜歴史研究会

古谷　多聞

<復習>

1.作戦計画の契機

**通説:第15軍司令官牟田口廉也中将の野望と自責の念**

①野望:己の功名心.出世欲に駆り立てられ陸軍大将昇進を目論み、インド/アッサム地方進軍を策謀

②自責:太平洋戦争の導火線となった**盧溝橋事件**(昭12(1937)/7)の当事者として戦争劣勢の挽回を期す

私見:①参謀本部内に潜在する**インド進出作戦構想**の発動

ドイツ/ロンメル将軍の北アフリカ戦線(=エジプト進出)に同調し、東進する独軍と西進する日本軍が中近東周辺で合流?

②**東條英機首相の政略**

i 太平洋島嶼での**戦局悪化の打開策と内閣の人気挽回.政権延命策**

ii 権力の集中化:昭19/2/21参謀総長も兼任(首相.陸相.総長)　　<参考> 作戦開始日:昭19/3/8

2.作戦認可までの経緯

(1) 現地軍内部(南方軍.緬甸方面軍.第15軍)の**不協和音**

①牟田口軍司令官の**独断独走**

部下を威圧.強圧し、剰え己の作戦計画(=インド/アッサム地方進軍)に反対し作戦中止を進言した軍参謀長小畑信良少将を解任する暴挙(昭18/5/26)　　・・現代で言えば"パワハラ"か!

②軍上層部間に**不協和音**・・翼下三師団長は牟田口軍司令官作戦構想に懐疑.懸念

第31師団長佐藤幸徳中将:**物資補給態勢の不備を指摘**

第33師団長柳田元三中将:**作戦計画其の物を疑問視.危惧**

第15師団長山内正文中将:**現地到着遅延で牟田口軍司令官の不興を買う**

牟田口軍司令官も三師団長を敬遠し、作戦会議(兵棋演習)にも召集せず

③上級司令部幕僚(南方軍総参謀副長稲田正純少将.方面軍高級参謀片倉衷大佐)は強硬に反対.異議

(2)参謀本部作戦課も牟田口軍司令官構想には否定的

(3)**軍事的合理性より組織の融和を優先:**

規律.規範.合理性を第一とする軍内部に日本人特有の浪花節的な**情実(私情)**と**忖度(人情)**を持込む

①方面軍司令官河辺正三中将の牟田口軍司令官に対する**情実**　:両者は盧溝橋事件では上官.部下の関係

「余は牟田口の心事を知る「角を矯めて牛を殺す」の愚は犯したくない　つまらぬ掣肘を加えず思うように遣らせて成果を挙げさせたい」

②参謀総長杉山元元帥の南方軍総司令官寺内寿一元帥への**忖度**

「寺内さんの初めての要請であって　たっての希望である　南方軍の出来る範囲で遣らせては良いではないか」

**<私見>**上記①②は昭14/6ノモンハン事件発生時、時の陸相板垣征四郎中将の一言「一個師団位の出動は現地に任せたら良いではないか」の再現で、「日本陸軍の組織融和の優先」の典型的な事例であると思料

3.多々の問題点を内包しつつ　昭19/1/7　参謀本部「インパール作戦」を認可

3/8　　第15軍作戦行動開始

## Ⅰ.日本軍(第15軍(軍司令官牟田口廉也中将)の戦力

1.第15軍の総兵力:85,600人=3個師団49,600人・その他直轄部隊36,000人

| 3　師　団 | 兵　力 | 砲兵火力装備 |
|---|---|---|
| 第31師団(師団長佐藤幸徳中将)<br>攻略地点:コヒマ方面<br>約340kmの徒歩行軍 | 歩兵団(宮崎支隊)<br>歩兵3個連隊<br>砲兵1個連隊 約16,600人 | 山砲17門<br>(砲弾150発/1門当り) |
| 第33師団(師団長柳田元三中将)<br>攻略地点:ビシェンプール方面<br>約310kmの徒歩行軍 | 歩兵団(山本支隊)<br>歩兵4個連隊<br>砲兵3個連隊<br>他戦車連隊　約17,000人 | 山砲9門<br>(砲弾800発/1門当り) |
| 第15師団(師団長山内正文中将)<br>攻略地点:インパール地方<br>約300kmの徒歩行軍 | 歩兵3個連隊<br>砲兵1個連隊約16,000人 | 連隊砲6門<br>(砲弾150発/1門当り)<br>山砲(明治31年式)4門 |

<参考>兵士携行:小銃弾240発.手榴弾6発.着替.鉄兜.円匙.天幕.雑嚢.雨外套.防毒面.水筒等

兵士によっては分解された山砲.弾薬等も携行

:糧食3週間分(2合/1食・6合/1日)　・・総重量約40kg

・・「兵士携行」の数量は永原実「歴史講座」から転記

<私見>牟田口軍司令官はインパール攻略期限を何故4/29(天長節)に固執したのか?

➡日本陸軍は旧日本記念日に合わせて総攻撃.攻略.制圧.占領等実施の因習があり

記念日:2月11日=紀元節3月10日=陸軍記念日4月29日=天長節11月3日=明治節等

2.馬匹:牟田口軍司令官の「ジンギスカン戦法」　・・「戦法」の詳細は前回発表「前編」レジュメご参照

| 種　類 | 数 | 用　途 |
|---|---|---|
| 軍馬 | 12,000頭 | 物資運搬 |
| ビルマ水牛 | 30,000頭 | 物資運搬.食用 |
| 象 | 1,030頭 | 物資運搬 |
| 羊.山羊 | 10,000匹(第15師団) | 食用 |

ビルマ水牛①体型は日本の牛とは異なり物資運搬用には不適

②調教に戦闘用兵士を転用し「駄牛隊」を編成➡戦闘用兵士不足が生じ戦力低下の因

③渡河.山岳行軍時に転落落下事故が続出　➡大砲等重火器類は分解し兵士が携行

<参考>ビルマ水牛の大量徴発(強制取立)

①親日派のバー・モウ首相でさえ「ビルマの民生を虐げつつある」と悲歎

②日本軍の大量徴発情況を英軍偵察機が発見➡日本軍のインパール方面進撃を察知

③日本軍の大量徴発.強制取立.現地調達=陸軍の悪しき慣行の一例で中国大陸戦線でも実行

3.航空戦力:第5飛行師団(師団長田副登中将)

牟田口軍司令官 ①航空戦力を軽視し、地上兵力による強行突破に固執

②掩護出動要請はチンドウィン河渡河作戦時にのみに止まる

4.インド国民軍(自由インド仮政府チャンドラ・ボース首相)

約6,000名・・インド独立の先陣の意気込み

**Ⅱ.英軍(第14軍:軍司令官スリム中将)の戦力**

1.①戦力:4個師団(歩兵44個大隊.砲兵12個連隊(288門))・戦車1個旅団(約120輌)・空挺1個旅団

戦力は日本軍の2～3倍　火器.戦車等は改良され、その数量.性能は日本軍を遥かに凌駕

②制空権も掌握

2.スリム軍司令官の戦略

(1)戦略の大転換=**戦略的退却**

①英軍兵站基地であるインパールまで一旦退却し、その地で捲土重来を期し巻き返しを図る

②日本軍をインパール地方に誘引し持久戦に持込み、日本軍の補給路伸長を待ち反攻に転ず

<私見>英軍の戦略的退却はロシアの伝統的戦略を踏襲=敵軍の補給欠乏.冬将軍の到来(今回は雨季到来)を待つ

(例) i ナポレオンのロシア遠征.第二次大戦の独ソ戦争

ii 日露戦争露軍クロパトキン将軍の長期的戦略:

日本軍は奉天会戦で勝利するも弾薬.兵員不足等で露軍を追撃する余力が無く休戦を模索

(2)兵士の意識改革=兵士のビルマ敗走(敗戦)complexを一掃し、戦意士気高揚の覚醒を図る

(3)日本軍戦法(=白兵攻撃.突撃の一点張り)を学習し、その対応策を構築

3.情報収集に注力

①1944/1　偵察隊　チンドウィン河東岸で日本軍斥候隊と遭遇し、日本第15師団の存在を確認

偵察機　〃　〃　に多数の筏.丸木(=渡河用).水牛(=運搬用)の集結を発見

②1944/2　偵察隊　山間部に開削新道を発見

➡日本軍のインパール地方進軍を確信し、進撃開始日を3月第1週目と予測

・・事前の情報戦に於いて勝利

<私見>日本軍は進撃前からの敗戦は必定

孫子の兵法　英国軍=「彼ヲ知リテ己ヲ知レバ　百戦シテ殆ウカラズ」

日本軍=「彼ヲ知ラズ己ヲ知ラザレバ　戦ウ毎ニ必ズ殆ウシ」

**Ⅲ.戦闘経過** ***「5,000人殺せば陣地は取れる」***

1. 牟田口軍司令官　*「どの位の損害があるか?」*

作戦参謀　*「はい　5,000人殺せば陣地は取れると思います」*

・・第15軍司令部内での牟田口軍司令官と作戦参謀との遣取で

「5,000人殺せば」とは　✖敵軍兵士の殺戮数

●日本軍兵士の戦死者数

<参考>「戦って死ぬ」事を「殺せば」と平然と言う参謀(=幼年学校.陸軍士官学校.陸軍大学校卒の日本陸軍のエリート中のエリート)の返答は　正しく己の驕り.不遜.選良意識.兵士を虫螻同然扱いする無神経さを象徴する言動である

:当時軍司令部主計将校の証言「戦慄の記録　インパール」から転記.要約

2.日本軍の進撃

(1)作戦行動開始直後は第31師団が要地コヒマを占領(4/6)する等順調に進撃?

3/23　大本営報道部は「我軍ハ印度国民軍ヲ支援シ3月中旬国境ヲ突破シ印度国内ニ進入セリ」と

**大々的に喧伝・・東條首相の一瞬の満悦の時か?**

<私見>順調な進撃は英軍の戦略的退却によるもので、日本軍は英軍戦法を予知せずまんまとその術中に嵌ったか

(2)日本軍攻勢の頓挫・・弾薬.糧食の欠乏

①4月に入ると**補給態勢の不備.欠陥が露呈し、弾薬.糧食の欠乏**が出始め**火力不足**は深刻化

ⅰ前線部隊の各師団からは第15軍司令部宛に「**弾薬.糧食の至急補給要請**」電文が頻発

特に作戦前から補給態勢不備を指摘していた佐藤第31師団長からの電文は、軍司令部の無策.不備を痛烈に非難　　➡後日佐藤師団長の独断撤退(抗命).師団長解任の因

<余談>糧食の欠乏

・「腹が減っては戦は出来ぬ」の実例!　　英語版:"An army marches its stomach"

・第31師団兵士達の流行歌の替え歌

「米が無くなりゃ草を食み　煙草無くなりゃヨモギ吸い　弾が無くなりゃ肉弾で

～ほんとにほんとに御苦労さん

雨のアラカン何処までも　担架担いで彷徨えど　米の補給は更に無し

糧を求めて移動する　　～ほんとにほんとに御苦労さん」

ⅱ糧食の中間搾取

兵站基地から搬送中の糧秣は途中の駐屯部隊に中間搾取され、現地前線部隊到着時には1/4まで減少していたとの事例もあり

②早めの**雨季到来**➡作戦(攻撃.補給等)遂行に支障を来す

③牟田口軍司令官の**4/29(天長節)迄のインパール攻略は絶望的戦況**の様相

3.英軍の反撃

①**戦略的退却は日本軍補給路伸長の引金**となり、日本軍進撃のbody blowとなる

②火器類(=戦車.火砲.自動小銃等)は物量.性能とも日本軍を圧倒

<参考>日本軍兵士は小銃弾240発.手榴弾6発の携行

③日本軍戦法の習癖(=白兵攻撃.突撃)を学習➡「**円筒陣地**」を設営し日本軍と対峙

④制空権の掌握➡

ⅰ日本軍を空爆　更に「ジンギスカン戦法」用の軍馬.水牛の逃散を誘発

ⅱパラシュートで円筒陣地に**空中補給**(=弾薬.食料.医薬品.衛生用品等)

<参考>日本軍の補給(糧食)は現地調達 or 徴発.取立が主

ⅲ戦傷者等を軽飛行機で収容

**<私見>**上記3-④-ⅱ.ⅲは日本軍には想定外の戦術で、米.英軍は伝統的に兵士の**生命安全.補給確保**を第一として戦術を構成　　・・人命安全.補給確保の差が勝負の分かれ目か?

(例)米軍ⅰ生命安全:洋上で撃墜された搭乗兵士救助.収容の為　飛行機.艦船を動員

ⅱ補給確保:補給計画実施の為には、民間人も登用

⑤**ウィンゲート空挺団**が日本軍背後に降下し日本軍を攪乱

⑥局地的に日本軍の抵抗(=第31師団宮崎支隊の奮闘)に遭遇するが、全線で日本軍を圧倒

**Ⅳ.作戦中止までの経緯・作戦中止決断の遅延・・「インパールの悲劇」演出**

1. 6/6 河辺.牟田口両軍司令官懇談時の遣取

牟田口 ***「ただ私の風貌によって察知して貰いたかった」*** と「作戦中止」を河辺軍司令官に言い出せず

<余談>牟田口軍司令官の本音は「最早インパール作戦を**断念すべき時期**である」か?

河 辺 ***「本人の口から「作戦中止」と言わないので「作戦中止命令」は発しなかった」***

①両者とも「作戦中止」の思惑を有するも、「**敗戦の責任回避**」の為「**作戦中止**」を決断せず

<参考>両者の「作戦失敗・作戦中止」の思惑(認識)時期

河辺軍司令官:「4月17日」・・4/29迄のインパール攻略に懸念(:本人の「日記」)

牟田口軍司令官:「4月末」 ・・河辺軍司令官に「作戦中止」の進言出来ず

②「作戦継続」が決定した事で、**兵士には苛酷な戦闘継続を強いる**事になり「インパールの悲劇(=白骨街道」の現出)」を防ぐ**最後の機会を潰す結果**となる

**<私見>**戦争に「俺の顔を見て判断してくれ!」とか「何も言わないから黙認した」との浪花節的台詞は軍事的合理性を第一とする軍隊には馴染まない言動である と思料する

2.作戦中止までの経緯

(1)参謀本部 現地戦況に懸念:

現地南方軍.方面軍から真正な戦況報告(=楽観的な情報のみ)を入手出来ない参謀本部は「牟田口軍司令官号令=4/29迄のインパール制圧は困難」と**現地戦況に懸念**

(2)①5/2 参謀本部次長秦彦三郎中将 現地視察で河辺方面軍司令官と面談

秦次長 「作戦中止」を示唆

河辺軍司令官 楽観的に「最後まで頑張りの一手あるのみ 暫く時日を!」と具体的方策を提示せず・・秦次長の感触:「河辺軍司令官の口振りは中止をせざるを得ない!」

②方面軍参謀後勝少佐 前線現場実態報告書を参謀本部作戦課杉田一次大佐(秦次長に随行)に提出

<報告書の内容>:**作戦継続に懸念・作戦中止を示唆**

ⅰ「我が軍の戦力.補給能力からして 奇跡(=英軍の自主的降伏.退却)が起こらぬ限り**攻略は不可能**」

ⅱ「補給態勢と雨季到来等を勘案 **作戦遂行の限度は雨季入りの5月迄、作戦終了は5月末とす**」

③杉田参謀 後参謀報告を下に「**インパール攻略は至難=作戦危機**」を参謀本部に打電

**・・インパール作戦開始後悲観的な現地戦況報告の第一報**

(3) 5/12 秦次長の視察報告(東條参謀総長以下省部首脳が列座)

①「**作戦成功ノ公算ハ逐次低下シツツアリ**」と**婉曲的に作戦中止含み**で報告

<参考>婉曲的な作戦中止報告の背景

ⅰ当初は杉田参謀案=「**即刻作戦中止**」で報告予定

ⅱ秦報告前に現地南方軍幕僚は参謀本部に「戦闘中の悲観的な観察を下すは不適当(=杉田報告)・近日中にインパール攻略の見込み」と作戦継続主張電文を発信

ⅲ**参謀本部=作戦中止.現地軍=作戦継続**の対立を回避する為婉曲的な表現となったもの

②悲観的な秦報告に対し**東條参謀総長の叱声**

ⅰ「どこが不成功なのか 何が悲観的すべきなのか 戦は最後までやってみなければ判らぬ」

ⅱ「若年の一参謀(=後参謀)の報告書を信じて帰って来るとは何事か」

③東條参謀総長の一声で**作戦継続が決定**

ⅰ「インパールの悲劇」を防ぐ最初の機会を潰す

ⅱ現地将兵に苛酷な戦闘継続を強いる 結果となる

**<私見>東條にとってインパール作戦の成功が唯一の光明**(=人気挽回.政権延命)であったと思料

(4)東條参謀総長 河辺軍司令官に督戦命令

「インパール作戦ハ今ヤ世界的問題ナリ 方面軍ハインパールヲ攻略スベシ」

(5)作戦中止.撤退までの経緯

6/6　河辺.牟田口両軍司令官懇談　「作戦続行」で合意・・p5-IV-1 ご参照

6/22　英軍　日本軍のインパール包囲網を突破　➡牟田口軍司令官「作戦中止」を決意?

<私見>牟田口軍司令官　八方塞がりで「万策尽きたか」?

6/26　第 15 軍　南方軍に「作戦中止」の具申電文を発信

・・牟田口軍司令官は最後まで自ら「作戦中止」を発せず、参謀長起案電文を黙って決裁

7/1　東條参謀総長　昭和天皇に「インパール作戦中止」を上奏　裁可

参謀本部　「作戦中止」を認可

7/3　南方軍　方面軍に「作戦中止」を命令

7/5　方面軍　第 15 軍に「作戦中止」を命令

7/10　第 15 軍　各師団に「攻勢任務解除.戦線の整理」を命令

7/13　第 15 軍　各師団に「撤退」命令

7/18　東條英機内閣総辞職　　<参考>7/7　サイパン島陥落

8/12　大本営報道部　インパール作戦の失敗を「インパール戦線整理」と発表

「コヒマ及インパール平地周辺ニ於テ作戦中ナリシ我部隊ハ 8 月上旬印緬甸国境付近ノ戦線ヲ整理シ　次期作戦ニ準備中ナリ」

<私見>戦線の整理=陸軍お得意の欺瞞的表現（例）

シベリア侵略➡出兵　日中戦争➡日支事変　ガダルカナル島撤退=転進

インパール作戦敗走➡整理等

8/30　河辺.牟田口両軍司令官とも更迭　参謀本部付となる

<私見>①指揮官が作戦中止を認識.決断を下すまで 2 ヵ月と言う長時間が、兵士達を"地獄"に叩き落とす事になり「白骨街道」の現出の要因となる　・・「責任なき戦場」から転記.要約

②本作戦が「情実・私情」と「忖度・人情」に始まり、「優柔不断・責任回避」で終局したのは日本陸軍の特質ではなく、日本人が持つ何かしらの特質であろうか?

③何かしらの特質=人間関係の重視.組織の融和優先は、今日の日本の各社会にも根強く存続しているものと思料する

## V.三師団長の解任・抗命

1.牟田口軍司令官と三師団長の不協和音・軋轢

| | | | |
|---|---|---|---|
| 牟田口廉也第 15 軍司令官 | 陸士 22・陸大 29 | 実戦派:盧溝橋事件.シンガポール攻略 | 解任理由 |
| 山内　正文　第 15 師団長 | 陸士 25(首席)・陸大 36 | 知性派.知米派 | 病症悪化 |
| 柳田　元三　第 33 師団長 | 陸士 26・陸大 34(恩賜) | 知性派.陸軍稀代の秀才 | 戦意不足 |
| 佐藤　幸徳　第 31 師団長 | 陸士 25・陸大 33 | 実戦派:張鼓峰事件 | 無断撤退 |

(1)不協和音・軋轢の根底

①日本陸軍軍閥=皇道派(牟田口)・統制派(佐藤)の感情の縺れ

②牟田口軍司令官は実戦経験者で、知性.合理派(=山内.柳田等)を敬遠.毛嫌いする性癖が有り

③三師団長は作戦前の作戦会議(兵棋演習)で牟田口軍司令官構想に懐疑.懸念

④牟田口軍司令官は三師団長を敬遠し、その後の作戦会議に召集せず

<私見>上記③④は作戦開始前に[意思疎通の欠如]はインパール作戦敗戦の一因

目標達成の為には指揮官以下全将兵が一丸となって意思の統一.団結の結集が肝要であると思料する

3.第15師団長山内正文中将(明24/10/8～昭16/8/6)・昭17/6/2　第15師団長拝命

:陸士25期(首席)・陸大36期・米国陸大卒・駐米大使館付武官・知米派

(1)第15師団現地到着遅延の経緯・・P1-(1)-2-②の補足説明

昭18/6　第15軍に編入　(編入前は中国大陸各地を転戦)

/7　中国/上海から海上輸送で仏印サイゴンに上陸・・船舶事情により数班分割で移動

/9　南方軍命によりタイ国内で道路補修工事に従事し同国に据置

<参考>①道路改修工事命=南方軍総参謀稲田副長が牟田口軍司令官のインド/アッサム地方進軍を翻意させる為の意図的な「タイ据置工作」

②稲田副長の意図=第15軍をタイに長期間据置する事で、その間牟田口軍司令官の進軍構想断念(=戦力不足)を期待

③牟田口軍司令官の嫌味=「第15師団は戦いが怖いからタイに長期駐屯しているのか?」

(2)昭18/12中旬　第15軍から「早期軍帰属」の出願(=牟田口軍司令官の焦燥)でビルマに行軍

急遽出陣の為現地到着時には

i 全師団兵力の2/3しか到着せず➡兵員.装備不足で出陣

ii 急遽行軍の為将兵間に疲労感が漂う

iii 師団幕僚は牟田口構想を理解する時間が無く作戦準備不足　現地情勢にも不案内

<私見>①現地到着遅延は南方軍命であり、第15師団の責に非ず

②歴史に"if"が存在し、「師団のタイ据置工作」が実施されずタイ上陸後任地に直行していれば

i 牟田口軍司令官構想通り2月初旬の作戦行動開始が可能　(実際の作戦行動開始日は3/8)

ii 第15師団は完全装備態勢で戦場進出が可能

等で戦局は大いに変動していたであろうと推測、そういう意味で南方軍命「第15師団のタイ据置」はインパール作戦敗戦の(裏面の)一因と言っても過言ではないと思料する

(3)昭19/3/15　チンドウィン河渡河し、4月上旬にはインパールまで数十kmに迫る奮戦

6/10　山内師団長　持病の結核悪化.マラリア罹患で師団長職解任　(8/6現地で戦病死)

<参考>太田嘉弘は「インパール作戦」で山内師団長の師団の統率力.実戦での力戦を高く評価

3.第33師団長柳田元三中将(明26/1/3～昭27/10/9)・昭18/3/10　第33師団長拝命

:陸士26期・陸大34期(恩賜)・陸軍稀有の秀才・合理的で知性派　しかし弱気な性格もあり

(1)牟田口軍司令官の「インパール作戦」構想に対する柳田師団長の対応

①公的な作戦会議(兵棋演習)では表立って作戦構想に異議を発せず

<私見>牟田口軍司令官の威圧.強圧の前では異議を言い出せなかったのではなかろうか?と推測する

②私的懇談会で作戦構想に疑問視.危惧を表明　<私見>内心は「作戦絶対反対」ではなかったか?と

➡牟田口軍司令官の知性派を敬遠.毛嫌いする性癖と相俟って、柳田師団長発言に感情を害し忌避

③軍司令部から第33師団軍宛の命令.伝達等は柳田師団長を排し、直接師団参謀長に下す

(2)作戦中

①柳田師団長の消極的な「統制前進」策

②3/24隷下第215連隊から「苦戦中」の電文*を受信

*「電文」概要「連隊ハ暗号書ヲ焼キ軍旗ヲ奉焼シテ全員玉砕覚悟デ奮闘ス」

柳田師団長　「玉砕覚悟を玉砕した」と誤認

③3/25　柳田師団長　「インパール作戦中止」を牟田口軍司令官に具申

➡牟田口軍司令官　柳田師団長の「作戦中止具申」「統制前進策」を「師団長の戦意不足」と断定

④5/16　柳田師団長　師団長職解任

<私見>①弱気で青白き秀才の柳田中将を戦闘最前線の師団長発令は、参謀本部人事の誤謬

・・最前線の指揮官には実戦経験豊富で勇猛果敢且つ沈着冷静な猛者が最適と思料する

②海軍でも同事例が有り:太平洋戦争開戦直前に艦隊勤経験不足の井上成美中将を最前線の第四艦隊司令長官発令は結果的に珊瑚海海戦の戦略的敗北に繋がる

③知性派の柳田.井上を軍中枢部から疎遠したとの見方もあるが、両者発令は官僚組織の典型的な「人事の順送り・年功序列」の弊害の犠牲者とも言えるか?

**4.第31師団長佐藤幸徳中将**(明26/3/5～昭34/2/26) ・ 昭18/3/25 第31師団長拝命

:陸士25期・陸大33期・張鼓峰事件(昭12/10)に参戦

(1)佐藤師団長 牟田口軍司令官との確執の経緯

①佐官時代

i 陸軍派閥（佐藤師団長＝統制派・ 牟田口軍司令官＝皇道派）の感情の縺れ・・「反りが合わず」か?

ii 第6師団参謀転属発令(昭9/8)を当時参謀本部牟田口廉也庶務課長の謀略的転属発令と逆恨み?

②インパール作戦行動開始前牟田口軍司令官構想に佐藤師団長は弾薬.糧食等の物資補給態勢の不備

➡作戦行動前に軍司令部から**物資補給万全の確約**を得

③作戦行動中

i 4/29 牟田口軍司令官の「宮崎支隊のインパール地方転戦命令(=第15師団支援)」を「兵力抽出不可能」と**命令を拒否**・・第1回目の抗命 <余談>牟田口軍司令官の命令撤回で落着

ii コヒマ占領後(4/6) 物資欠乏が顕著となり軍司令部に「**物資補給要請**」督促電文を再三発信

・・佐藤師団長からすれば作戦行動前の軍司令部と師団との**確約履行**を迫る

iii 軍司令部は物資補給確約返電するも"カラ手形" 補給実施も途中「中間搾取」され最前線には未着

iv 軍司令部の物資補給不履行に対し、佐藤師団長自ら激烈な「**軍司令部非難**」電文を発信

「軍司令部非難電文」は更に上級司令部の緬甸方面軍・参謀本部にまで発信

(2)第31師団無断退却

5/25 物資欠乏を理由に**退却の予告電信**・・「**第31師団独断退却**」の前触れ

「師団ハ今ヤ糧絶エ山砲及ビ重火器弾薬悉ク消耗スルニ至レルヲ以テ、遅クトモ6月1日迄ニハ「**コヒマ**」**ヲ撤退シ補給ヲ受ケ得ル地点迄移動セントス**」

6/1 佐藤師団長 軍令違反を覚悟で「**撤退開始**」号令 ➡牟田口軍司令官「**軍令違反**」と激怒

7/5 佐藤師団長 師団長職解任

(3)軍法会議開催の是非

①牟田口軍司令官:佐藤師団長の陸軍刑法違反*(=無断撤退)を盾に軍法会議開催を請求

*陸軍刑法違反陸軍刑法第42条:

「**司令官敵前ニ於テ尽スヘキ所ヲ尽クサスシテ隊兵ヲ率イ逃避シタルトキハ死刑ニ処ス**」

佐藤師団長 :牟田口軍司令官の作戦無策を糾弾する為「軍法会議開催を受けて立つ」の心構え

②河辺緬甸方面軍軍司令官:師団長=親補職が被告の軍法会議開催に難色

<理由> i 上級司令部(=南方軍.緬甸方面軍.第15軍)の作戦指導失態が暴露される事を危惧

ii **師団長=親補職は天皇の任命事項**であり、**責任問題が天皇にまで波及**する事を回避

③河辺軍司令官:佐藤前師団長を精神鑑定に付し「急性精神過労症」の名目で不起訴とし、曖昧な裁定で軍法会議開催にケリをつける

<余談>軍の無断撤退

①ノモンハン事件:連隊長クラスの無断撤退を軍法会議開廷せず「**自決強要**」で決着

・・詳細は令3/7・令4/8「ノモンハン事件前・後編」で発表済

②インパール作戦:師団長の無断撤退を「**精神異常者**」として決着

(4)佐藤第31師団長無断撤退の余波

①第31師団の将兵:佐藤師団長の行動は「天の恵み(=飯に有り付ける・助かる)」と感謝

②第15師団　:第31師団の無断撤退は「寝耳に水」で、英軍に側面.背後を急襲され敗走

同師団将兵にとって第31師団の無断撤退は「恨み骨髄に入る」であったろう

③著名な戦史家伊藤正徳.児島襄等そして現地他師団の幹部将校も佐藤師団長の行動を挙って批判

その批判をrandomに列挙・・一部私見をも組入れ

i「陸軍刑法第42条」に抵触し、**軍人の本道**に悖る行為である

ii微視的には戦場脱出で配下将兵の多数の命を救出した功はあるも、巨視的には**軍の戦線を崩壊**させ「白骨街道」現出の要因となる

iii同じ劣悪下で奮戦中の友軍の第15.第33師団将兵を置去り.見捨てた行為は「**武士道精神**」に反す

iv自分の師団の事だけを愚考するのは余りにも短絡的で独善的な発想である

v軍司令部に対する物資補給要請手段を電信一報だけでなく師団参謀を軍令部に派遣するなり、それでも埒が明かない時は師団長自ら軍司令部に出向き師団の窮状を牟田口軍司令官に直談判する事も必要であったのではなかろうか?

vi無断撤退するにしても友軍の第15.第33師団に事前連絡し、両師団の了解を得る必要があったのではなかろうか?

vii牟田口構想に問題点があり、劣悪下の状況に置かれても**臨機応変に対応するのが師団長=陸軍中将の器量**ではないか　果たして佐藤中将は師団長職の器であったろうか　佐藤中将の力量は精々「連隊長クラス位」ではなかろかと吾は臆測する

<余談>無断撤退は師団次席の師団参謀長に謀ることなく、佐藤師団長本人の独断で決定したとの由

**<私見>**牟田口軍司令官の三師団長解任の私的見解:

同軍司令官の暴挙(牟田口=悪玉)であるとの批判が大であるが、吾はその解任行為までの経緯を勘案すれば納得する点もある

①山内師団長の解任:本人の身体状況(=結核が重症)からして止むを得ない対応と思料

②i **柳田師団長の戦意不足**

**佐藤師団長の無断撤退(=抗命):**

両師団長の行動は軍人として言語道断　勝利を追求する**総指揮官としての牟田口軍司令官の「両者解任」の対応は妥当**であったと思料

ii本作戦は陸軍最高機関の**参謀本部の承認事項**であり、牟田口構想に問題点があったとしても配下師団長は**軍人として上官構想に沿って行動を執る義務**があったと思料する

・・・「悪法も法なり」か?

<余談>作戦中、指揮官更迭の事例

①日露戦争旅順攻撃時の指揮官乃木希典大将の作戦不手際

:参謀本部.現地の満洲軍総司令部幕僚の間には乃木更迭の声が出たが、明治天皇の鶴の一声で軍司令官続投が決定したとの由?

②米軍　昭19/6サイパン島上陸作戦総指揮官H.スミス海兵隊中将の発動

:配下の陸軍歩兵師団長を進撃遅延を理由に更迭・・勝利至上の為には海兵隊・陸軍の組織の壁を越えてまでも厳格な処分=更迭も必要な事例

<参考>1964/東京オリンピック女子バレーボール監督大松博文は第31師団独立輜重中隊士官として本作戦=コヒマ攻撃に参戦　戦後の回想

①佐藤・牟田口両将軍の醜い争いを批判的に垣間見る

②撤退当初の隊は軍律は保たれていたが、次第に統制は乱れ将兵間の相互信頼関係は一挙に崩壊

VI.「インパールの悲劇」・・「白骨街道」の現出

1.日本軍(三師団のみ)の損害状況　　出典:「戦史叢書」

| 師　団 | 総動員 ① | 戦死者 ② | 戦傷病死③ | 行方不明④ | 後方戦傷病⑤ | 小　計⑥ (②+③+④+⑤) | 残存兵 ⑦ | 損耗率 (⑥÷①) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 第 15 師団 | 15,280 | 3,678 | 3,843 | 747 | 3,712 | 11,980 | 3,300 | 78% |
| | | (②+③=7,521) | | | | | | |
| 第 33 師団 | 14,280 | 4,002 | 1,853 | 405 | 不明 | 12,080 | 2,200 | 84% |
| | | (②+③=5,855) | | (6,225) | | | | |
| 第 31 師団 | 14,999 | 3,700 | 2,064 | 不明 | 不明 | 9,999 | 5, 000 | 67% |
| | | (②+③=5,764) | | (4,235) | | | | |
| 合　計 | 44,559 | 11,380 | 7,760 | (14,919) | | 34,059 | 10,500 | 76% |
| | | (②+③=19,140) | | | | | | |

(注) i 第 33 師団・第 31 師団・合計の行方不明④+後方戦傷病⑤は:①−(②+③+⑦)から逆算

ii 永原実「歴史講座」:総動員数約:10 万人戦死者:30,502 人・戦傷病者:41,978 人　損耗率 72%と記

<参考>「インパール作戦」の損耗率 76%は、昭和 17〜18 年のガダルカナル島作戦の損耗率 61%に比し如何に苛酷.悲惨な戦闘であったかを物語る

**<私見>**戦死者数<戦病死者数.行方不明者数　進軍<撤退(敗走)時が通説になっているが「戦史叢書」からだけでは実態は不明

1.「白骨街道」とは

作戦撤退(敗走)時、初っ端は集団で撤退していたが途中落伍者の続出で行き倒れ.置去り等にされた死体が道路に延々と連なり　又蛆.豹.鷹等の餌食にもなり更に豪雨等で白骨化したもの

2.現出の要因

①糧食不足による栄養失調

②赤痢.マラリア等の罹病で体力消耗

③強烈な豪雨=当地は世界最大の豪雨地帯(年間降雨量 25,000 ミリ)　東京:年間 1,500 ミリ.屋久島:年間 8,000 ミリ

④日本軍作戦中止決断の遅延:作戦中止の機会　5/12 秦参謀本部次長の戦況報告　..p5-IV-1 ご参照

6/6　河辺.牟田口両軍司令官の懇談　..p5-IV-2-(3)ご参照

7/10　作戦中止命令　..p6-IV-2-(5)ご参照

⑤英軍の追撃

3.撤退(敗走)時の状況は正に「生き地獄の世界」であったろう

そんな悲惨な状況を浅学菲才な愚生には文字に認める文才も無いので、以下の事項は参考文献を孫引きしてその代表的なものを記す

①集団自決.野戦病院に置去り.死体から略奪=真っ先に狙われたのは軍靴で次が食糧.死体を食す

②小銃を手放しても「飯盒」だけは持って放浪

③兵隊乞食=「兵隊さん　兵隊さん　お願いです　米を〜」と同じ兵隊が兵隊を見て「兵隊さん」と言う

<参考>英軍司令官スリム中将の回想:「日本人指導者の欠点は**道徳的勇気の欠如**にある」

「日本軍の指導者の根本的な欠陥は　肉体的勇気とは異なる道徳的勇気の欠如である

彼らは自分達が間違いを犯し作戦が失敗し、練り直しが必要である事を認める勇気が無かった」

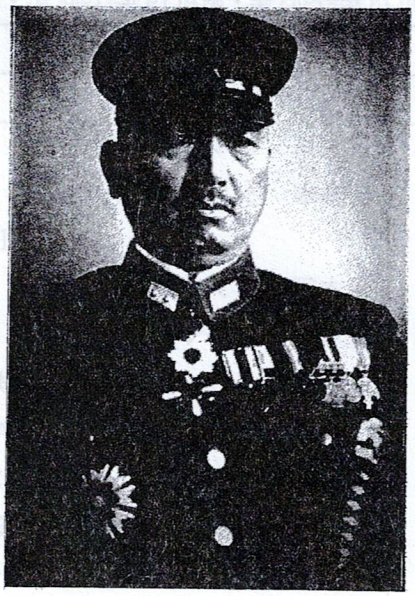
**<私見>**結果的には敗戦の責任を誰もとらない愚かな戦(イクサ)であったと思料する

## 太平洋戦争　真珠湾攻撃からインパール作戦までの戦況

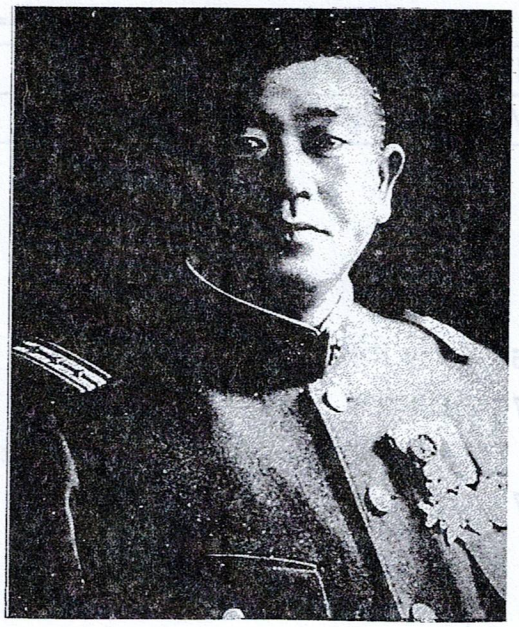
昭和16年=1941年・昭和17年=1942年・昭和18年=1943年・昭和19年=1944年・昭和20年=1945年

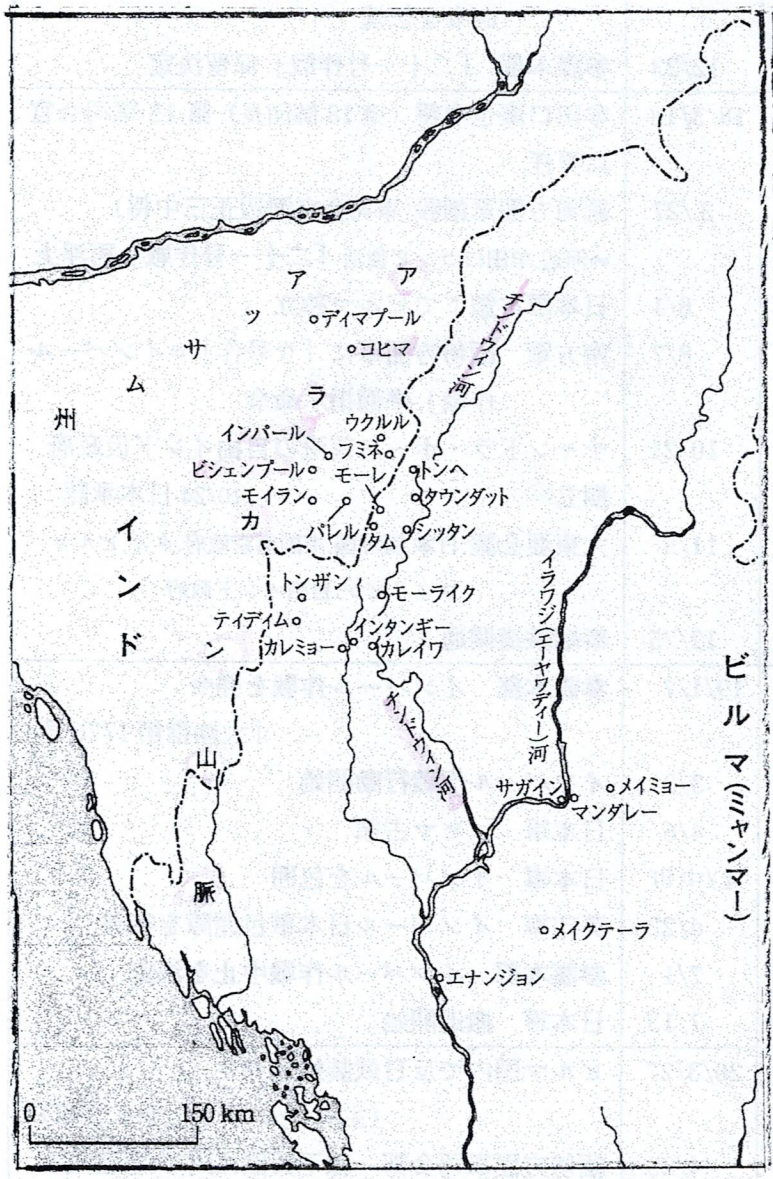
| 年月日 | 太平洋戦争全般 | 年月日 | インパール作戦関連 |
|---|---|---|---|
| 16/12/8 | 日本海軍　真珠湾攻撃 | | |
| | | 17/1/15 | 日本軍　ビルマ攻略開始 |
| | | 2/15 | 日本軍　シンガポール攻略<br>・・牟田口将軍の武勲 |
| | | 3/9 | 日本軍　ラングーン占領 |
| 17/6/5 | ミッドウェー海戦 | 5/10 | 日本軍　ビルマ全土制圧 |
| 6/7 | 日本海軍　惨敗<br>**➡太平洋戦争海戦の turning・point** | 8/5 | 南方軍　「インド東北部に対する防衛地域拡張に関する意見」を具申 |
| 8/7 | 米軍　ガダルカナル島に上陸 | 8/22 | 参謀本部　南方軍に「東部インド作戦準備に関する指示」を示達<br>・・「二十一号作戦」 |
| | | 9/1 | 南方軍　第15軍に「二十一号作戦」の準備命令を伝達 |
| | | 12/23 | 参謀本部　「二十一号作戦」保留決定 |
| 18/2/1 | 日本軍ガダルカナル島から撤退開始<br>**➡太平洋戦争陸戦の turning・point** | 18/3/18 | 牟田口廉也中将（第18師団長）第15軍司令官に昇任 |
| | | 3/27 | 緬甸方面軍創設(軍司令官河辺正三中将)<br>➡河辺.牟田口コンビ復活「**二十一号作戦**」**再浮上** |
| 4/18 | 山本五十六聯合艦隊長官戦死<br>**➡日米軍攻守逆転　日本軍守勢一方** | 8/1 | 日本軍占領下でビルマ独立 |
| 5/12 | 米軍　アッツ島上陸 5/29 日本軍玉砕 | 8/7 | 南方軍　緬甸方面軍に「ウ号作」=インパール作戦」準備指示命令 |
| 7/29 | 日本軍　キスカ島から撤退 | 10/21 | チャンドラ・ボース首班の自由インド仮政府樹立　10/24 日本承認 |
| | | 11/5 | 大東亜会議:日本.満洲国.中国南京政府.タイ.ビルマ.フィリピン.自由インド政府 |
| 11/25 | タラワ.マキン両島の日本軍玉砕 | | |
| | | 12/25 | 泰緬鉄道開通 |
| 19/2/17 | 米軍　トラック島(聯合艦隊根拠地)を強襲➡米軍次の目標はサイパン島 | 19/1/7 | **参謀本部　インパール作戦を発令**<br>:「大陸指第1776号」 |
| 2/21 | 東條英機首相陸相　参謀総長を兼任 | 3/8 | **インパール作戦行動開始** |
| | | 4/6 | 日本軍　コヒマ占領 |
| | | 4/中旬 | 日本軍　インパールを包囲 |
| 6/15 | 米軍　サイパン島上陸作戦開始 | 6/22 | 英印軍　インパール日本軍包囲陣を突破 |
| 7/7 | サイパン島日本軍守備隊玉砕 | 7/1 | **参謀本部　インパール作戦中止を決定** |
| 7/18 | 東條英機内閣総辞職 | 7/13 | 日本軍　撤退開始 |
| 20/3/10 | 東京大空襲 | 20/3/27 | ビルマ国内で反日武装蜂起発生<br>(主導者:アウン・サン将軍) |
| 5/29 | 横浜大空襲 | 4/23 | 緬甸方面軍司令部　隷下兵団.日本人居留民を放置しラングーンから逃避 |
| | | 5/3 | 英印軍　ラングーンを奪回 |

牟田口 廉也（むたぐち れんや）

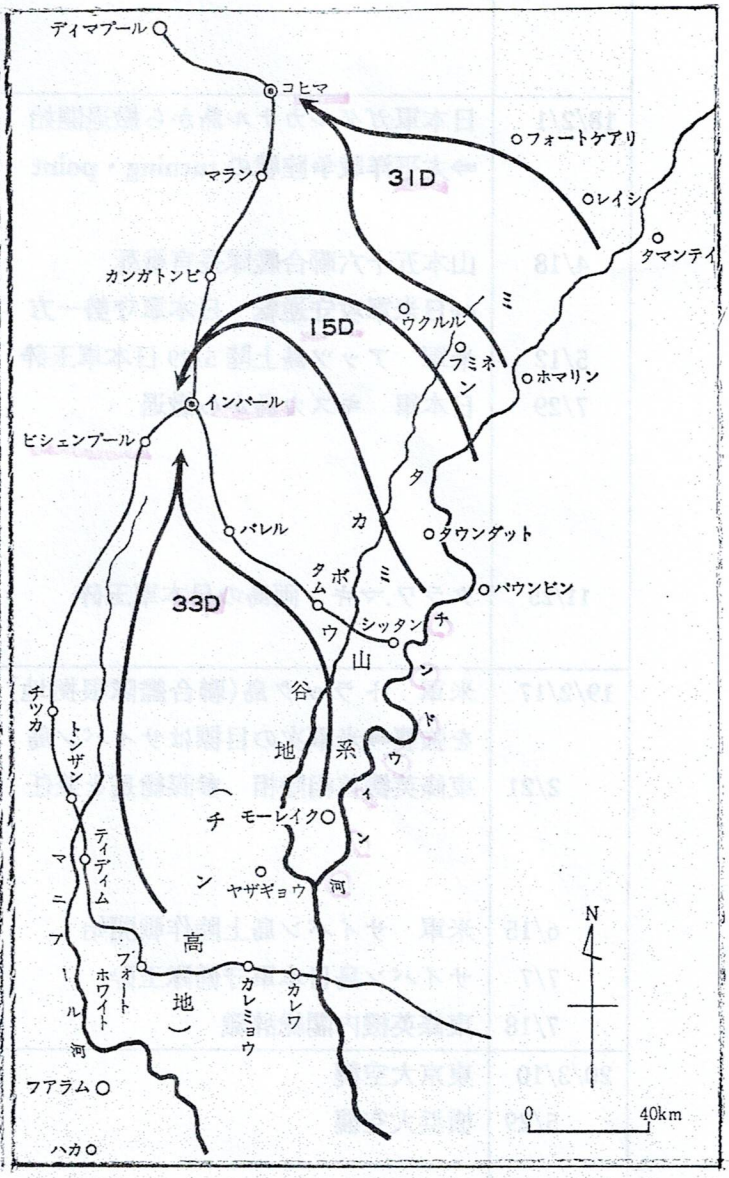


佐藤 幸徳






関連地図(『戦史叢書 インパール作戦』付図をもとに作成)




第15軍インパール作戦構想図

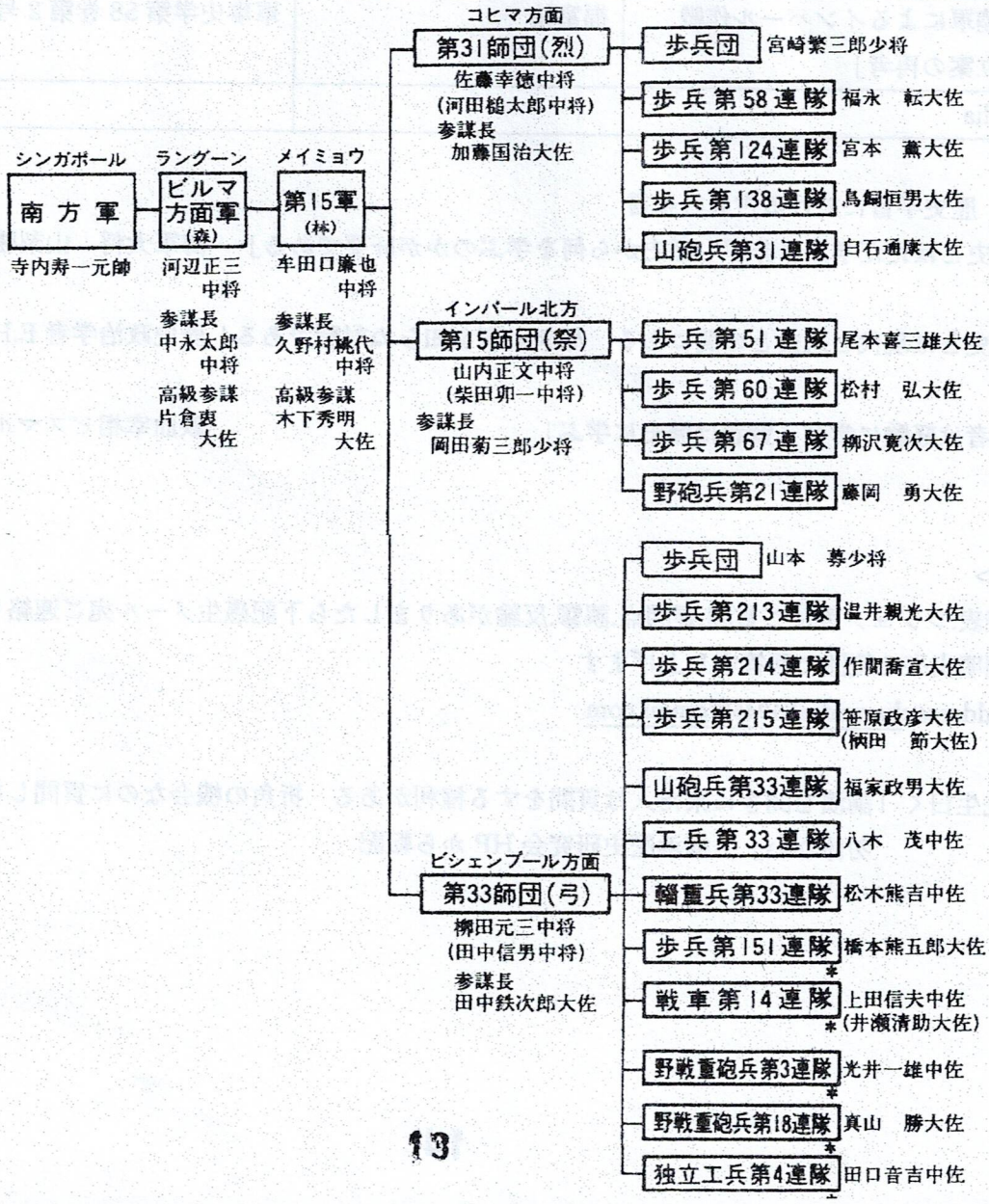
## 山内 正文

| | |
|---|---|
| 生誕 | 1891年10月8日 |
| | ● 大日本帝国 滋賀県 |
| 死没 | 1944年8月6日（52歳没） |
| | ビルマ国 |
| 所属組織 | 大日本帝国陸軍 |
| 軍歴 | 1913年 - 1944年 |
| 最終階級 | 陸軍中将 |

## 柳田 元三

## インパール作戦時の日本軍編制

人名（　）は後任　（＊は配属部隊）



<雑話>

1.横浜市立図書館内の竹山道雄著「ビルマの竪琴」の書棚の所在場所は?

2.前年度発表後に先輩からの苦言:

「お前は反戦.非戦.避戦を主張するならリヒャルト・ワグナーの「ワルキューレの騎行」を聞く前に「埴生の宿/"Sweet Home Sweet"」を聞け　この歌は立派な反戦歌である」と

3.「平和の世の中で人を殺せば**犯罪者と**なるが 戦争で人を殺せば**英雄**になる」

<参考文献>順不同


| 書　　名 | 著　者 | 発 行 社 |
|---|---|---|
| 「失敗の本質」 | 戸部良一他 | ダイヤモンド社(1984) |
| 「責任なき戦場　インパール」 | NHK 取材班 | 角川書店(1993) |
| 「戦慄の記録　　インパール」 | NHK スペシャル取材班 | 岩波書店(2018) |
| 「インパール作戦<br>ビルマ方面軍第 15 軍敗因の真相」 | 大田喜弘 | ジャパン.ミリタリー.レビュー<br>(2008) |
| 「インパール作戦　その体験と研究」 | 磯部卓男 | 磯部企画(1973) |
| 「組織の不条理　日本軍の失敗に学ぶ」 | 菊澤研宗 | 中央公論新社(2017) |
| 「インパール作戦」 | 永原実 | 現代史講座(2022) |
| 「抗命」 | 高木俊朗 | 文春文庫(1976) |
| 「日本陸軍によるインパール作戦<br>構想立案の再考」 | 福富祐一 | 軍事史学第 58 巻第 2 号(2022) |
| Wikipedia | | |


<余談>　歴史学習に於ける古人の金言

1.「歴史とはただ学ぶに非ず　歴史から**何を学ぶ**のかが肝要である」　海軍大将　山梨勝之進(日本)

2.「歴史とは現代と過去との間にある　尽きぬ事を知らぬ**対話**である」歴史政治学者 E.H.カー(英国)

3.「愚者は経験に学び　**賢者は歴史に学ぶ**」　鉄血宰相ビスマルク　(独国)

<最後に>

今日の発表.レジュメ等にご質問.疑問点.誤謬.反論がありましたら下記愚生メール宛ご連絡ください

愚生の判明出来る範囲で回答申し上げます

E-mail address :hamadash1945@gmail.com

松尾光先生曰く「講演を聞きに来た人は質問をする権利がある　折角の機会なのに質問しないなんて勿体ない」　横浜歴史研究会 HP から転記

<番外編>吾の独り言(独断・偏見)!　「ロシアのウクライナ侵攻」/第三弾・・令6/2末記

2023/10パレスチナ/ガザ地区での突発的な紛争勃発.2024/1台湾総統選挙による台湾海峡の緊張化、米国大統領選挙共和党候補者の予備選.露大統領選挙等によりウクライナ情勢は隅に追いやられた感がする
現地ではウクライナ軍の反攻頓挫.露軍の反撃等で戦線は膠着化し、解決の糸口は見えず情勢は混沌.長期化しているのが現状であると思料する

始めに手前味噌

①昨年の第二弾で露の**ワグネル・グループ(=露の準軍事民間会社)排除の予測が的中**
歴史は繰返されるが如く1933/6ドイツ/ヒットラーによる突撃隊(=ナチスの準軍事組織)粛清と同様
正規軍をバックにする権力者=プーチンには抗しきれず露軍中枢部から排除され霧散

②慶應義塾大学総合政策学部廣瀬陽子教授との出会い
令和4年秋秋慶應義塾公開講座(於日吉キャンパス)同教授講義終了後、厚かましくも横浜歴史研究会のPRを兼ね愚生の雑文「ロシアのウクライナ侵攻第一.第二弾」を進呈
後日教授から教授執筆「ハイブリット戦争　ロシアの新しい国家戦略」(ご本人の署名入り)を拝受

1.両国軍の現状

(1)ウクライナ軍:**兵員不足、弾薬不足**、欧米諸国の「**支援疲れ**」等で苦戦の情報
①徴兵拒否による不法国外脱出者の増加で兵員確保に懸念あり
②兵員不足を兵器でcoverするのに躍起になっているが、各国の「支援疲れ」もあり当初の熱が冷めた感があり弾薬不足は深刻化　支援国からの弾薬補給が喫緊の課題と思料
③欧米諸国からの支援.供与兵器類(=戦闘機.戦車.ミサイル等)が前線に配置されその効力が発揮しているかは不明であるが、今後その兵器類の効力が発揮されれば現地戦線の形勢はウクライナ軍に有利に展開する可能性も有りえるのではなかろうか?

(2)露軍
①その広大な国土を利用しての兵員確保はウクライナ軍に比し優位
受刑者を兵員として動員し人海戦術で対応しているとの情報もあり
・・兵員動員数だけを見ればウクライナ軍の劣勢は免れず・・両国国力の差か?
②多数の戦車が損傷し、旧式或いは第一線から退いた戦車までも動員しているとの一部情報もあり

(3)当の戦場ではウクライナ軍が優勢なのか?　露軍が優勢なのか?　は両国の報道管制もありその優劣は不明であるが、部分的な面では小国ウクライナ軍は大国露軍を相手に善戦しているのではなかろうか!

2.ウクライナ国・軍の命運は米国が握る

(1)米国は今秋に大統領選挙を控えリーダーシップを発揮出来ない事が紛争の混迷化.長期化の因と思料
・・米国下院は野党共和党多数でウクライナ支援関連予算が棚上げ状態

(2)大統領選挙で民主党候補者(**バイデン**現大統領の続投か?)が勝利すればウクライナ支援策は継続
・・米大統領には強大なリーダーシップを発揮する事を期待する

(3)①もし"America First"を掲げる共和党候補者**トランプ**が当選したら**ウクライナ支援の即刻中止**が予測される
・・「**もしトラ**」➡「**ほぼトラ**」➡「**かく(確)トラ**」の現実化の懸念
②トランプの施策:
1972/2(昭47)当時のニクソン米大統領が電撃的に日本を頭越に中国を訪問した如く突如として当事国ウクライナを無視して頭越に「紛争解決」に向け**プーチンと単独会談**で決着を謀るのではないか?

③トランプの米大統領 comeback はウクライナは勿論、日米間.欧米間の外交・防衛・経済関係にとって「**最悪のシナリオ**」と思料　　・・此処は**米国民の良識に期待**する他なし

④トランプの"America First"の短絡的思考は、佐藤第 31 師団長の「無断撤退」と共通する**自己本位の発想と類似**している思料する

3.露国事情

①露大統領選挙は絶対多数でプーチンの 5 選が確実視されているが、権力者による国内世論の抑圧.報道管制.選挙干渉等で国民の生の声.プーチンの支持基盤は不透明　　・・反プーチン運動を弾圧か?

②プーチンは米国次期大統領にはバイデン現大統領よりトランプの方が組易し見、永久独裁政権確立を目指す格好の政治材料として「渡りに船　待ってました!」とばかりにウクライナを neglect しトランプと**裏取引**をして「紛争」に決着を付けるのではなかろうかと推測する

③馬鹿を見るのはウクライナ.ウクライナを支援している欧州諸国.バイデンに追随した日本であろう

4.和平会議開催の道のり

①儚い願望=日本が率先して和平会議開催を提唱

i 日本単独での力不足の時は、露の精神的友好国の中国と共同提議するのも一策か

ii 日本外交の力試し.国内政権支持率 up の絶好の機会であるが　外交は「超党派」で推進するのが望ましい!

②現状の日本:現在の政権は「裏金問題」で立往生しており、然も各国を説得出来る外交影響力を有しているかは疑問符　　・・正しく「儚い願望」である

中国:台湾問題.国内経済不振もあり国際舞台に立つ余裕は無し

③現在和平会議開催の目途は付かないが　もし会議開催となれば米露二国間だけによる密室内での会談には不賛成　1938/6「*ミュンヘン会議」の再現を回避する為には**主権国家.当時国ウクライナの参加は不可欠**と思料　　・・此の件に関しては吾の持論で第一.第二弾で記述済

*「ミュンヘン会議」:チェコスロヴァキア/ズデーデン地方の帰属問題を巡り主権国家.当事国のチェコスロヴァキアを除外し英仏独伊 4 ヵ国首脳だけで会談　最終的に独要求通り同地方の独帰属が決定

➡当初英仏の「宥和政策」は戦争回避と大歓迎されたが、結果的に第二次世界大戦の遠因となる

④和平会議成立の要=ウクライナ・露両国の面子を立てる為「三方一両損(=「大岡裁」)・「互譲の精神」が肝要　　・・吾の持論で第二弾でも記述済

i ウクライナ:現露支配地域を放棄(露に譲渡)

**NATO 加盟の実現・・「名を棄て(=国土放棄)　実を取る(=NATO 加盟)」**

ii 露国　　:現支配地域(クリミア半島付近周辺の現実効支配地域も含む)を露国**実効支配地域**とする

**<私見>**①ウクライナは国土譲渡については欧米諸国の説得もあり応ずるであろう

②会議成立の最大の neck はウクライナの NATO 加盟に露が絶対拒否であろう

露はウクライナの NATO 加盟により地政学的に露と NATO 加盟国とが国境接壌で国家防衛上多大な脅威なることを危惧し、ウクライナを中立国(露の支配国)に仕立て上げ露と NATO 諸国との緩衝国とする事で NATO の軍事力の脅威負担軽減を図る事が本音であろう

③**プーチンの最大の誤算・焦り**:ウクライナ侵攻によりフィンランド・スウェーデンの北欧 2 ヵ国が NATO 加盟を表明しバルト海は NATO の内海化とし、更なる NATO 拡大化を最大の誤算と臍を噬んでいる事であろう

④和平会議開催の可能性は現状ゼロであるが、今後の状況推移は全て今秋**米国大統領選挙結果次第**であろう　ド素人の吾には全く予測出来ないが、一日でも早期和平が実現しウクライナの国民が安寧な日常生活が送れる事を希求するのみである